

# 高齢者の生活様式と地域のコミュニティの 支援構造に関する研究

長谷川 裕紀\*

## 1. 研究の目的

現在、日本は世界の中でも例をみない速度で高齢化が進んでいる。総務省の人口推計によると、平成 19 年から 65 歳以上の高齢者人口が 21% を超え、超高齢社会に突入している。超高齢社会になり数年経過した現在、介護の担い手の不足や、年金問題等、様々な問題が発生している。このような問題に対する対策が、早急に求められている状況にある。生活の中でも、日常の支援を受けながら生活できる安心・安全な住宅、生活地域の形成は重要である。現状の社会状況から、今後の日本では、年金や社会福祉制度に依存して生きて行くのは難しいと予想される。その結果、ある程度、生活者自らが安全を確保し、安心して生きていくコミュニティが必要となる。

本研究は、地域での高齢者の見守り・支援について 10 年以上取り組んでいる愛知県半田市岩滑区で実態調査を行い、新しく形成された居住地周辺の小さなコミュニティを通じて、実施されている支援と、その効果を明らかにし、今後の方向性を提言することを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、①高齢者の生活実態(平成 24 年 1 月 21 日～2 月 11 日に岩滑区在住の独居高齢者(22 名)に対して行ったヒヤリング調査)、②高齢者施設の利用状況(平成 25 年 5 月 15 日～27 日に、半田市内にある高齢者が利用可能な公的施設の利用者計 294 名に対して半田市が実施したアンケート調査)、③安住のまちづくりについての意向調査(平成 26 年 2 月 1 日～15 日に、岩滑区在住の「ごんの灯かり」設置者(138 名)に対して行ったアンケート調査)を、集計・分析、検討した。

## 3. 岩滑区在住の高齢者の人間関係

半田市岩滑区の高齢者は、住居年数・年齢が高くなるにつれて日常的に往来のある件数が減ってゆく傾向があることが分かった。これは、高齢化による近身体機能の低下に伴い、介護施設等への入所や、外出頻度が下がるためと考えられる。また、「日常的に往来がある」、「立ち話をする」という両項目において「いない」と 31% が回答しており、近隣関係は、日常的に形成されていないことが分かる。しかし、81% の高齢者が「近隣の人たち・誰とでも挨拶する」と回答していることから、この地域では人間関係の形成の初期段階ができていると考えられる。

## 4. 新たなコミュニティの形成

岩滑区は、新たな取り組みとして「ごんの灯かり」に着手している<sup>1)</sup>。「ごんの灯かり」とは、

---

\* ) 大学院家政教育専攻

LEDの光システムによる相互見守りの仕組みで、近年1年以内に考案された新たな取り組みである。隣近所の人間関係をさらに強化し、高齢者による、相互の見守りにつなげることを目的としている。2～3名のグループで設置し、朝と夜にLED電球の色を切り替えるもので、「切り替えていなかった際には声をかけること」とされている。31名の設置者が、設置するか否かを「隣近所に相談した」と回答しており、設置時にも近隣関係が大きく影響していることを示している。設置後4ヵ月後から、近隣の人間関係が形成される効果が表れ、4ヵ月後には8割以上の設置者が「付けて良かった」、「会話が增えた」と回答している。このことから、「ごんの灯かり」設置者間で新たにコミュニティが形成されたと言える。

## 5. コミュニティの関係

岩滑区の多くのコミュニティ活動は、コミュニティセンター、やなべふれあいセンター<sup>2)</sup>を中心に実施されており、「ごんの灯かり」のみ、居住地の近隣という狭い範囲で機能しているコミュニティである。この「ごんの灯かり」を通じて、ふれあいセンター内のサロン花のき村<sup>3)</sup>での話題を聞く事があるという回答もみられることから、「ごんの灯かり」を通じて複数のコミュニティに属している高齢者が情報交換を行っており、各コミュニティが完結・閉鎖することなく、相互に繋がっていることが分かる。

## 6. まとめ

公的施設を中心に、地域の全体を対象として構成された大きなコミュニティに対して、今後は、居住地周辺の小規模なコミュニティ形成が必要となってくる。このような、生活に即した見守りができるコミュニティを形成することによって、高齢者は、より安心し、地域の中で生活を送ることができると考えられる。人間関係が希薄になる傾向はあるが、無いとは言い切れない地域において、岩滑区のように、相互に見守るコミュニティをつくることにより高齢者に緊急時が発生した場合、早急な対応が可能になると考えられる。現在、「ごんの灯かり」では、緊急の際には区に連絡が行き、次いで家族に連絡が行くようになっている<sup>4)</sup>。このように、主体は地域住民であるが、全体的なバックアップを区や市が支援していく構造が望ましい。

(指導教員：小川 正光)

## 註

- 1) 平成26年度5月より設置。平成24年度ニッセイ財団高齢社会先駆的事業の一環として取り組む。
- 2) 昭和50年に完工し、岩滑区民の活動の拠点となっている。毎日多数のサークル活動や講座が行われる。
- 3) やなべふれあいセンター内に併設されており、高齢者のボランティア60～80名が、月～土曜日にコーヒーを提供している。
- 4) 住民台帳を作る際に、高齢者に対しては緊急時の連絡先を記入している。また、区民全員に「緊急医療情報キッド」物を配布し、緊急時の連絡先や状服薬を記入し、冷蔵庫に保管するという取り組みも行っている。